

氏名	望月 重宏
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第98号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	現代の小ロット商品開発におけるラグジュアリー性の研究 プロダクトと工芸の融合
審査委員	主査 教授 塚田 章 教授 田島 達也 准教授 笹井 史恵 伊東 徹夫（京都市立芸術大学名誉教授） 小山 格平 （京都精華大学大学院デザイン研究科教授）

## 論文の要旨

本論文のテーマである“ラグジュアリー性”とは単に値段が高い高級品ということではない。「価値の高さの表現」が重要である。顧客に対し、これが特別なものであり、価値が高い、ということをも明確に伝えなければならない。そのために何が必要であるかを探るため、第1章で江戸時代から近代のハイエンドの工芸品を調べた。そこで素材の良さ、技術の高さ、希少性などに加え、お誂えというシステムも重要であることがわかった。これらの工芸品が、目利きし、職人を組織し、発注者とやりとりをするなかで生み出されてきたことが確認できた。また江戸時代からの絵師の家系である私の家に伝わった粉本の、デザインソースとしての可能性を考察した。

次に第1章では、近代から現代に至る物作りの変化を確認する工芸から大量生産への推移を中心に論じ、今日の技術であるデジタル機器の活用への可能性を探る。まず『工芸ニュース』の記事を中心に大量生産に移行する推移を確認した。次に、近年めざましい発達を遂げるデジタルファブリケーションの現状を追い、これがかつてのお誂えの工芸と現代のプロダクトを再び結びつける可能性を有していることに着目する。これにより可能になる小ロット生産では、お誂えの伝統がある京都での物づくりに優位性がある。京都では自分の所だけですべてを作るのではなく、必要に応じて様々な技術を組み合わせて生産される。これを今日あらためて「Crafted in Kyoto」という言葉により、積極的に推し進めていくこととする。

第3章ではこれまでに制作してきた高蒔絵のギター、ヘアピン、漆プレート、スマホケースを紹介し、第4章ではそこに第1章、第2章を通じて得られた知見を加え、戦略的に新しい製品を開発していく過程を記す。

## 審査結果の要旨

望月氏の研究テーマは“現代の小ロット商品開発におけるラグジュアリー性の研究—プロダクトと工芸の融合—”である。

大量生産を前提にグローバルに展開されてきたプロダクト・デザインでは、マスとなる多数のユーザーの要求に応えるデザインが前提で、生産効率、生産コスト、収益性等を最優先として計画される。安価で高品質の製品が実現されるのは膨大な開発に関わるコストを償却台数で割り込む事で実現される。生産台数で価格は大きく変化し小ロット（ロットとは生産単位）になればなるほど高額にならざるを得ない。

大企業では安定した収益が確保されるボリュームゾーンに向けての製品開発が目指されかなりの規模でのロットで生産されることとなる。本研究は小ロット商品開発に関するもので、コンシューマーに向けてこれまで対応されて来なかった分野である。更に広範囲のニーズに応える商品では、際立った装飾を施す事には消極的で、本研究テーマのラグジュアリー性という部分をどの様に扱うかはまさに研究途上でトヨタ、日産、パナソニック等はそこに向けての開発を模索しているというのが現状である。

氏は京都に育まれた文化の中に在るモノ造りに注目し、本研究は自らの出自を定義するところから着手している。京都のもの造りの特徴を「Crafted in KYOTO」と定義して分析がなされ、制作に展開している。具体的には「漆金高蒔絵螺鈿 Bass (Violin type solid Bass)」、「和柄 Canoe」、「Apple Watch HERMES 金蒔絵装飾」、「Pierce・Earrings・Necklace 金蒔絵装飾」、「祇園お茶屋の花器」が制作された。これらは全てクライアントから発注されたものである。当然プロダクト・デザインの案件なので使用する事を前提の発注であり、複数生産に対応できるようにデザインプロセスに関わるデザイン情報は全て整えられている。クライアントからの高い要求に応えるべく、工程ごとに最適な工房、職人、技術者をその都度連携させ制作されている。これらの制作では氏はディレクターという立ち位置ではあるが、漆の制作で職人に任せきれない部分は自ら制作に関わって作品は実現されている。

ギャラリー展示では入口から、本研究テーマに辿り着く契機となった制作物が4点ほど展示され、その奥に「漆金高蒔絵螺鈿 Bass (Violin type solid Bass)」、「和柄 Canoe」、「祇園お茶屋の花器」、「Pierce・Earrings・Necklace 金蒔絵装飾」、「Apple Watch HERMES 金蒔絵装飾」及び華飾表現の元となった粉本、及び屏風が展示され、イメージをいかにプロダクトに反映させたかが分かるデザイン指示書も展示されている。これらは氏の研究成果であるラグジュアリーな表現が施された製品として明確に示されており、個々のエレメントの完成度も高いものであった。公開審査に参加した外部からの研究者からも高い評価を得ている。

漆職人との協同で制作された「漆金高蒔絵螺鈿 Bass (Violin type solid Bass)」は、完成度が極めて高く仕上がっている。そこで展開される技法も高度で、長年その仕事に携わってきてこそ実現できるもので、更に楽器として要請される高度な品質は、プロの楽器製作者によって組み立てられているため、ハイエンドな演奏に必要な性能は担保されている。

「和柄 Canoe」では本漆にこだわることをせず、想定される使用状況（耐光性、耐久性）から敢え

て高級乗用車で用いられる塗料を採用し、華飾部分に望月家の粉本からのコンテンツを展開させラグジュアリーな表現が試みられている。

氏が本研究で駆使した制作のネットワークは長年かけて構築したものであり、かつ氏の出自があって形成された部分もある。本研究での氏の新たな知見として重要な位置づけとなるのは、制作プロセスにデジタル機器を活用することで、開発に関わる低コスト、時短が実現でき、伝統工芸の従来の伝統工芸制作で膨大な時間とコストの部分を軽減する道筋を得たことで、これにより逆に手での制作に職人が関われる領域が整理できることである。開発段階で用いられる様々なデザインモデルを、コンピュータを活用することで整理、統合あるいは情報伝達の精度を向上させながら、設計情報を共有できるもので、開発に関わるコスト及び時間等が大幅に抑えられると期待され、大量に造らなくても単価が抑えられる。今後のプロダクト・デザイン領域における小ロット商品開発及びラグジュアリー性を発揮した応用が期待される。本研究は高い水準であり、博士号の基準を十分に満たしていると、審査員全員一致で判断した。